

信頼形成に関する調査研究

筑波大学システム情報工学研究科リスク工学専攻

1 班：荒井 健太，羽生 裕造，山口 武洋，Ahmad Khushairy

指導教員：掛谷 英紀

2007 年 9 月 28 日

1 はじめに

近年、リスクマネジメントに関する研究において信頼の役割が注目されている。これは、リスクマネジメント管理者、機関への信頼が、問題となるリスクレベルの認知や環境対策の受容に大きく影響するからと考えられている。

信頼の欠如は社会的なコストの増大を招く。たとえば、姉齒建築士耐震強度偽装問題では、買い手の不信感は強まり、売り手の信頼は大きく損なわれるに到った。この信頼の欠如を補うために、政府は中間調査機関を設けるといった、監視・制裁体制を強化したが、それによって生じた社会的負担増は無視できない。

また、信頼の欠如は、正確な情報が社会全体に共有されない事態を招くこともある。たとえば、BS E問題のように、政府の責任者が国民から十分な信頼を得ていないがために、政府のリスクマネジメント能力への懷疑から、国民がリスクを過度に高く見積もるといった反応が生まれることもある。

一般に、リスクマネジメント責任者に対する信頼が高いとリスクは低く見積もられ、ベネフィットは高く見積もられる。信頼が低い場合は条件が逆転する。どちらも、リスクコミュニケーションが円滑に進んでいない状態といえる。

これらの事例からもわかるように、適切な信頼関係の構築は、社会の構成員がリスクに対する合理的な判断を下すために極めて重要である。

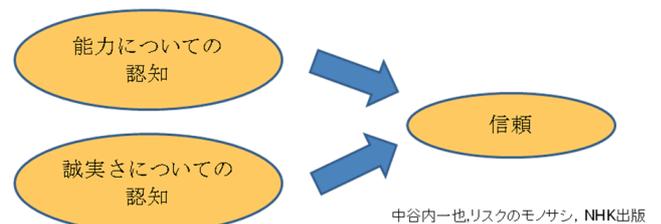
そこで、本研究では、人々の間で信頼感がどのように形成されるかについて、従来社会心理学の分野

で研究されている二要因モデルと SVS モデルの二つのモデル[1][2]をベースに、新たな質問項目を加えたアンケート調査により精緻な分析を行う。

2 伝統的モデル(二要因モデル)

「信頼」研究では、「リスク管理者への信頼とは、該当リスクマネジメントを任せておいてもまずいことにならないだろうと期待すること」と定義されている。そこで、本論文でも、この定義に基づき議論を進める。

代表的な社会心理学の既存研究によると、信頼とは対象となる人、または機関に能力があり、公正な性格がもつと判断された時に生じるものとする（信頼の二要因モデル）。そこで、リスク管理機関は政策の科学的根拠を示すことで能力認知を向上させ、また、第三者機関のリスク評価を利用するなどして公正さの認知を改善しようとしてきた（図1）。



中谷内一也、リスクのモニタリング、NHK出版

図1 伝統的二要因モデル

ところが、実際には、このような方法を用いても信頼は必ずしも向上しないことも多い。このことは、二要因モデルでは説明することができない要因が存在することを示唆する。

3 Salient Value Similarity (SVS) モデル

上で述べた伝統的な二要因モデルに対し、SVS モデルという新たなモデルが Earle らにより提案されている[3]。このモデルでは、人は相手と自分とが該当問題において重要な価値を共有しているか否かが信頼の大きな要因となっていると仮定する（図2）。何が信頼を左右する価値となるかは文脈によって異なる。政策決定における科学的な合理性や決定方法の公正さといった手続き的要素が重要な場合は伝統的二要因モデルと SVS モデルは一致することになる。

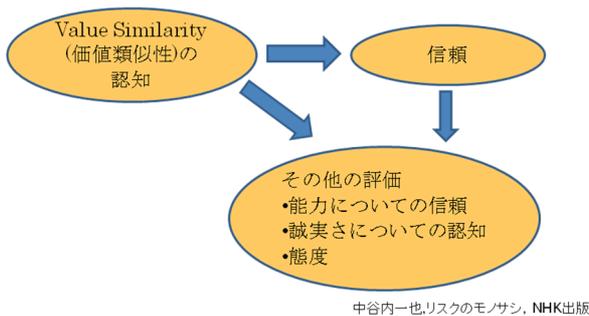


図2 SVS モデル

しかし、決定によってもたらされる事態そのものが個人にとって重要な価値となりうる場合、SVS モデルは別の予測をとることになる。つまり、出力価値が自分と共通したもの、つまり共有性認知によって相手への信頼が決まり、それと整合性を保つ形で能力や公正さが帰属されると考えるのである。そして当人にとって該当リスク問題が重要で関心が高いほど出力価値が重視され、関心が低いほど二要因モデルに近くなる。つまり、二要因モデルと SVS モデルは逆の因果を想定するということである。

ここで、リスクマネジメントにおける信頼は日常生活とは違った側面を持つことに留意する必要がある。リスク管理責任というのは主に企業や、政府

にあり、責任者の能力や誠実さを直接確認する機会がほとんどない。このため、相手の立場や所属などを手がかりとして相手の推定主要価値と自分の主要価値の類似性を評価しそれに整合する形で誠実さ、能力が付随すると考えられる。

・4 先行研究

中谷内が信頼の SVS モデル[1][2]において SVS モデルと伝統的モデルの比較検討を行っている。モーターボート論争[1]において、アメリカの水源湖でモーターボート問題の調査を、日本国内にて遺伝子組み換え米に関するアンケート調査を行っている。[2]

モーターボート論争に関する調査結果を表 a、表 b、表 c に引用する。表 a は、信頼と SVS、公正さ、能力のピアソン積率相関を示したもので、いずれも高い相関を示しているが、中でも信頼と SVS との相関が最も大きな値を示している。表 b は、公正さと能力認知の相関を示したもので、これも高い値を示している。表 c は、利害関係と信頼の相関関係を調べたもので、ここにも強い関連が認められている。これらの結果から、中谷内は伝統的モデルよりも SVS モデルの説明力が高いと結論づけている。

表 a 信頼性と3項目のピアソン積率相関[1]

	規制反対団体	規制賛成団体	州議会	研究所
SVS	0.85	0.78	0.72	0.73
公正さ	0.85	0.74	0.69	0.69
能力	0.78	0.67	0.67	0.66

表 b 公正さと能力認知のピアソン積率相関[1]

規制反対団体	規制賛成団体	州議会	研究所
0.88	0.87	0.84	0.89

表 c ポート利用頻度と信頼性の相関[1]

	規制反対団体	規制賛成団体	州議会	研究所
単相関	-0.45	0.35	-0.15	-0.16
偏相関	-0.09	0.10	-0.04	-0.05

また、遺伝子組み換え米[2]では、モーターボート論争において、関心度の項目で最高値を選んだ割合が約三分の一と高かったため、関心の薄い層がいる問題での調査を目的として行っている(表 d)。ここで表 2 と同様に相関を求め、モーターボート論争に比べると低い、高い相関関係にあった(表 e)。また、信頼に関して重回帰分析を行い、各項目の影響を調査している。この表から影響度は SVS、公正さ、能力の順であることが示された(表 f)。

表 d 遺伝子組み換え米での関心度の分布[2]

まったく関心がない	1	2	3	4	非常に関心がある
	11.3	20.5	28.2	25.0	15.0

表 e 公正さと能力認知のピアソン積率相関[2]

農水省	厚労省	国際機関	反対団体	患者団体
0.542	0.556	0.556	0.503	0.580

表 f 信頼性に関する重回帰分析[2]

	農水省	厚労省	国際機関	反対団体	患者団体
SVS	0.304	0.327	0.340	0.290	0.290
能力	0.145	0.188	0.167	0.122	0.216
公正さ	0.291	0.255	0.215	0.375	0.285

5 本研究の目的

本研究の目的は、第一に、伝統的モデルと SVS モデルに関して、どのような人に対しても SVS モデルの説明力が高いのかを検証することである。先行研究においては、伝統的モデルよりも SVS モデルの方の説明力が高いと統計的に示されたのみであり、こ

のモデルが一般性を持つとされたわけではない。そこで本研究では、このモデルが一般性をもつものであるかを検証する。

具体的には、個人毎にアンケートの回答パターンを解析し、SVS モデルで説明される集団、伝統的二要因モデルで説明される集団に分け、それぞれの集合に属する人のプロフィールの特徴を調べる。

6 調査方法

*調査対象者

筑波大学及び他大学に所属する大学生、大学院生 201 人を対象とした。文系、理系、男女構成は次のようになる。

文系男子 34, 文系女子 58,
理系男子 104, 理系女子 5

*調査期間 2007 年 7 月 16 日から 9 月 27 日

*質問紙 質問項目は大きく 3 つあり、自動車事故、遺伝子組み換え食品、煙草とした。それぞれについて 4 つ又は 6 つの組織に関する説明を行う。続いてそれぞれの組織に対する

①信頼、②能力認知、③公正さ認知、④価値共有性認知⑤それぞれの問題に対する関心の関係をプロフィール別に回答パターンの特徴を分析する。具体的にはそれぞれのテーマごとに実在、仮想な関連団体の名前と見解を示し、その組織についての信頼などの①から⑤に関して回答してもらった。また、テーマに対する関心度や利害関係などを問う問題も含んでいる。

・ 7 結果

表 1 から 3 に、理系男子に関する、各質問におけるそれぞれの組織について、SVS 認知と信頼、及び、公正さ認知と信頼、能力認知と信頼の相関を示す。加えて公正さ認知と能力認知のピアソン相関を加

えて示す。

表1 理系男子 自動車事故に関するピアソン積率相関

	警察庁	メーカーA	遺族会	B教授
能力	0.498	0.424	0.323	0.233
公正さ	0.419	0.455	0.240	0.269
SVS	0.535	0.540	0.386	0.286

表 1.a 公正さ認知と能力認知の相関

警察庁	メーカーA	遺族会	B教授
0.434	0.619	0.470	0.525

表2 理系男子 遺伝子組み換え食品に関するピアソン積率相関

	農水省	NO	厚労省	普及会	WHO	C講師
能力	0.491	0.521	0.425	0.510	0.507	0.446
公正さ	0.372	0.456	0.335	0.353	0.479	0.167
SVS	0.590	0.566	0.474	0.465	0.481	0.498

表 2.a 公正さ認知と能力認知の相関

農水省	NO	厚労省	普及会	WHO	C講師
0.460	0.555	0.421	0.550	0.643	0.336

表3 理系男子 煙草に関するピアソン積率相関

	WHO	JT	FM	BAT	禁煙学会	D助教授
能力	0.545	0.392	0.292	0.449	0.542	0.328
公正さ	0.536	0.336	0.290	0.381	0.552	0.319
SVS	0.575	0.618	0.563	0.510	0.600	0.473

表 3.a 公正さと能力認知の相関

WHO	JT	FM	BAT	禁煙学会	D助教授
0.642	0.465	0.457	0.465	0.464	0.566

表1からそれぞれの組織についてSVSが信頼と最も高い相関を示していることがわかる。これは表3についても同様であり、表2についても同様に見ることができる。よって理系男子の信頼はSVSとの関係性が強いといえる。さらに公正さ認知と能力認知において、能力認知に重点を置いているのではないかと考えられる。

同様に表4から6に文系男子について示す。

表4 文系男子 自動車事故に関するピアソン積率相関

	警察庁	メーカーA	遺族会	B教授
能力	0.251	0.427	0.352	-0.060
公正さ	0.478	0.663	0.376	0.420
SVS	0.106	0.624	0.277	0.272

表 4a 公正さ認知と能力認知の相関

警察庁	メーカーA	遺族会	B 教授
0.561	0.344	0.570	-0.024

と大きく関係していることが読み取れる。よって文系男子の信頼は SVS ではなく公正さに起因していると考えられる。

最後に表 7 から 9 に文系女子について示す

表 5 文系男子 遺伝子組み換え食品 に関するピアソン積率相関

	農水省	NO	厚労省	普及会	WHO	C 講師
能力	0.414	0.410	0.440	0.428	0.536	0.133
公正さ	0.530	0.661	0.435	0.673	0.697	0.575
SVS	0.725	0.522	0.565	0.553	0.755	0.433

表 7 文系女子 自動車事故に関するピアソン積率相関

	警察庁	メーカーA	遺族会	B 教授
能力	0.203	0.232	0.193	0.191
公正さ	0.304	0.349	0.183	0.207
SVS	0.664	0.440	0.494	0.438

表 5.a 公正さ認知と能力認知の相関

農水省	NO	厚労省	普及会	WHO	C 講師
0.594	0.403	0.512	0.599	0.669	0.256

表 7.a 公正さ認知と能力認知の相関

警察庁	メーカーA	遺族会	B 教授
0.260	0.255	0.445	0.295

表 6 文系男子 煙草に関するピアソン積率相関

	WHO	JT	FM	BAT	禁煙学会	D 助教授
能力	0.486	0.478	0.277	0.396	0.435	0.244
公正さ	0.489	0.574	0.564	0.678	0.268	0.410
SVS	0.711	0.343	0.720	0.417	0.539	0.254

表 8 文系女子 遺伝子組み換え食品 に関するピアソン積率相関

	農水省	NO	厚労省	普及会	WHO	C 講師
能力	0.379	0.419	0.454	0.230	0.407	0.378
公正さ	0.588	0.464	0.552	0.365	0.404	0.548
SVS	0.741	0.448	0.713	0.442	0.681	0.633

表 6a 公正さ認知と能力認知の相関

WHO	JT	FM	BAT	禁煙学会	D 助教授
0.609	0.498	0.343	0.496	0.199	0.511

表 8.a 公正さ認知と能力認知の相関

農水省	NO	厚労省	普及会	WHO	C 講師
0.582	0.588	0.590	0.472	0.604	0.411

表 4 から 6、それぞれのについて公正さが信頼

表9 文系女子 煙草に関するピアソン積率相関

	WHO	JT	FM	BAT	禁煙学会	D助教授
能力	0.655	0.130	0.262	0.299	0.538	0.555
公正さ	0.655	0.394	0.550	0.674	0.402	0.486
SVS	0.681	0.347	0.550	0.509	0.544	0.585

表 9.a 公正さ認知と能力認知の相関

WHO	JT	FM	BAT	禁煙学会	D助教授
0.669	0.323	0.406	0.326	0.540	0.746

表7から9から文系女子に関してはSVSの要素が信頼に影響を与えていると考えられる。また能力認知と公正さ認知のどちらに重点を置くかという点で公正さに重点を置いているのではないかと考えられる。

・考察

価値共有性認知は理系の男子、文系の女子において信頼と高い相関を示しており、理系の男子に関しては一般的な予想に反するものであった。また文系男子に関しては SVS と信頼に関して高い相関を示していることがわかった。また理系の男子は SVS 認知が信頼と大きな相関を持つという共通点を持つ一方で、能力認知と公正さ認知のどちらを重視するかという点について違いを見て取れた。このような違いについては今後母体数を増やすなどしてより深く考察していく必要があると考えられる。

参考文献

- [1] 中谷内一也, “信頼の SVS モデル(2) : 伝統的信頼モデルとの比較”, 日本リスク研究学会講演論文集, pp.405-408, (2005)
- [2] 中谷内一也, “リスクのモノサシ” NHK ブックス, (2006)
- [3] Earl, T. C., & Cvetkovich, G. Social Trust: Toward a cosmopolitant society. Westport,CT: Praeger Press, 1995